

〈書評〉

Kiyoaki Kikuchi
Studies in Medieval English Language and Literature II
The Sound of Literature:
Aspects of Language and Style in The Owl and the Nightingale
(春風社、2016 年)

玉 川 明日美

本書は、筆者の中英語・中世英文学の研究を結集した論文集の続刊になる。第一巻では、中世文学を取り巻く思想や表現形式の伝統について、『梟とナイチンゲール』、『カンタベリー物語』や『ガウェイン卿と緑の騎士』といった、代表的な中英語文学の分析を通して論じられている。筆者の研究の要となっているのは、中英語文学における〈音〉一口承性への着目である。中英語文学における〈音〉について、単なる先時代の文学伝統を継承した結果として見做すのではなく、むしろ、文学を生み出す人々の〈声〉の反映であり、現代へと連なる文芸上のリアリズムや世俗・人間主義の萌芽としての意義を筆者は見出ししており、その考察を刺激的なものとしている。第二巻にあたる、英文による本書では、初期中英語作品『梟とナイチンゲール』を取り上げ、徹底した文体分析を通して、作品成立当時に隆盛であったとされるヒューマニズム運動との関連について探り、本作の再評価を試みている。また、既に筆者は本作品の文体的特徴や修辞技法について、研究論文を複数発表しており、最新の校訂版を出版したダラム大学教授 Neil Cartlidge はこれらの論文を肯定的に幾度となく言及、引用し、その研究の水準の高さを伝えている。¹ 本書はそうした筆者の『梟』研究の集大成といえる。

序章では、『梟とナイチンゲール』成立当時の文学・芸術における伝統や潮

流といった、時代背景について解説されている。Douglas Bush による、中世におけるヒューマンイズム運動の隆盛に関する説を端緒として、筆者は本作品が、聖から俗、神から人へと主題を移行している点を指摘する(29-30)。特に、ヒューマンイズム運動における主要な要素、“‘domestic’ realism namely, self-assertion, secularism, and individualism” (17) を *Owl-poet* がいち早く、自らの作品と言語表現に反映させていることを述べている。中世、特に、*Owl-poet* が生きた初期中英語期では、宗教的主題が文学において支配的であったが、本作はあくまでも現実における日常や世俗的な人間の営みを肯定し、作品の中に取り入れている。それもひとえに、作者である *Owl-poet* が人間の〈個〉としての意識に関心を持ち、その価値を認めていたためだと筆者は述べる。

第一章では、『梟とナイチンゲール』と関連性が取り沙汰されている、問答詩『鶉とナイチンゲール』(c.1275) との比較分析がなされている。しかし、本章の主眼は、両作品の間にある相互関連性を論証することに置かれてはいない。むしろ、両者の比較を通して、従来指摘されてきた、『梟』がもつ“personal touch”や“humour”という点について、より明確に提示しようと試みている。先行研究においてなされてきた、いささか主観的ともとれかねない、両作品における“humour”の有無によって関係性を疑問視する指摘や、舞台設定や議論の題材の類似による関連性を述べる表面的な指摘に対し、筆者は疑問を呈する(38)。そして、これらの指摘を踏まえ、改めて両作品の歴史的な背景、文学的な伝統や言語学的な観点から再検討を行っている。両作品とも鳥が登場する「問答詩」としての形式を持ちながら、『鶉』が聖母信仰に基づいた、厳格な神秘主義的思想を背景に議論を展開しているのに対し、『梟』は世俗の世界に生きる人々の現状や知恵に根差した議論となっている。特に、両者の差異が顕著なのは、「問答詩」として議論の勝敗が決められる際、『鶉』はナイチンゲールが勝利する伝統に則った結末となっているが、『梟』は梟とナイチンゲールのどちらが勝者となったかが曖昧に終わっている(44-5)。というのも、聴衆もしくは読者に、その判断を委ね、共に議論に参加することを促そうとしているのではないかと筆者は考察する(45)。最終的に、それぞれの分析結果が必ずしも二作品の関連や無関係を断定する証拠にはなり得ない、と筆者は結論付けてはいるものの(50)、両者を比較することで、当時の文学における伝統の特色や、『梟』の世俗的かつ聴衆に配慮した展開などの特長が浮き彫りとなっている。

序章、第一章は『梟とナイチンゲール』を取り巻く環境への着目が主であっ

たが、続く第二章以降は、作品で使用された言語表現の分析を中心とした展開となっている。第二章では、梟とナイチンゲールそれぞれの科白における、従属節、関係節（加えて、使用される接続詞）、等位接続詞、法助動詞の全用例を挙げ、更に用例数を数値化し、そうした言語表現の多少によって、いかにして、二羽の性格や言葉に対する「印象」が演出されるのか詳細な分析を行っている。例えば、梟の科白には従属節（特にif節）が多用されるのを示し、懐疑的な性格がこうした文体的特徴によっても表現されている、と具体的な検証を行っている（62）。従属節が多く文章が複雑化しやすい梟と、等位接続が多く短文が連続しやすいナイチンゲールの文体を比較した際、二羽の対照的な性格と共に、身体的特徴の差異、更には、囀る〈声〉の違いをも詩人が表現しているのではないかと、筆者は述べる（61）。中世文学における口承性に関心を寄せる筆者ならではの指摘であり、かつ、Owl-poetによる巧みな表現を再認識させられるものである。第三章では、作品全体における、「口語的」と評される文体を論証するため、主語と動詞が一体となった縮約形、文章における主語・目的語の省略、使用語彙（外来語、英語本来語の分析）といった三つの観点から、統計的分析を行っている。これらの要素は、本作が持つ“octosyllabic iambic couplet”（八音節二行連句）形式のテンポと組み合わせられることで、鳥たちの言葉を、日常会話を模した、軽快かつ非常に生き生きとした調子にしている（82）。また、古フランス語やラテン語といった、難解な外来語の使用を避け、短音節の英語本来語を多く盛り込むことで、“familiar”と評される簡素で親しみやすい文体を実現しているのだと筆者は見解を示す（91）。

更に第四章、第五章では、本作の文体において最も特徴的なもののひとつである、“repetitive word pair”を中心とした分析と考察を行っている。第四章では、梟とナイチンゲールの科白における、慣用句の反復、文構造の反復、“And”の反復、同義語反復の用例の統計を示し、分析を行っている。現代の読者にとって、反復表現によって文の内容や意味が重複し、冗長だという印象を受けるが、こうした反復表現は本作が編まれた当時の文学の状況には、とても理に適ったものだとして筆者は指摘する。というのも、本作が黙読よりも耳で聞くことを想定して編まれたものであり、作中で鳥たちが交わす議論の合理性よりも、音声で紡がれる語りとしての「響きの良さ」が優先された可能性がある（99）。つまり、同構造の文章の反復は一見すると複雑には見えるものの、登場人物による畳みかけるような語りのスピード感や流暢さというものが演出され、また、聴衆にとっても次の内容が予想されて、聞きながら理解するのを妨げない、というの

である(102-07)。加えて第五章では、従来、本作が「問答詩」であるという観点から、同義語反復表現の修辭的意義(意味の強調、明示化)や韻律の要請といった解釈ばかりがなされてきたことに対し、筆者は本作が〈音〉の文学であるという観点から、反復表現の果たす役割について再度考察を加えている。また、本作品の随所に使用されている法律用語や反復表現が、法的文書における用法に則っていることを指摘し、梟とナイチンゲールの問答が法廷弁論を模した可能性についての考察(137)は、本作品の解釈を新たな局面へと誘う契機となるだろう。筆者が指摘するように、従来、反復表現に関する解釈は、『梟とナイチンゲール』という作品が編まれた当時の文学伝統への配慮が欠けており、ゆえに本作の「口語的」な響きに対する印象とのつながりが看過されたままとなっていた。また、読者が作品を読んだ時に受ける「印象」が、テキストに使用される一つ一つの語彙、その集合体としての文体によって演出されてきたものだという理解に基づいた詳細な言語分析が、今までなされていなかった問題もあった。W. P. Ker や J. W. H. Atkins、E. G. Stanly などの先行研究において、本作品の文体について“good-humoured”や“familiar”、“colloquialism”といった指摘がされているものの(56-57)、これらは、筆者の言葉を借りるならば、「印象論」的な指摘であり、ひいては、「感想」とも表現できかねる批評である。こうした従来の指摘は、本作を読んだことがあれば、概ね共感できるものであり、故に長く受け入れられてきたのだと思われる。そうした「印象論」に筆者は、徹底した言語分析と、本作が編まれた文学の環境への配慮を組み合わせることで、客観的かつ論理的な説明を加えることに成功している。しかし、このような先行研究を批判することが、筆者の目的ではないと思われる。むしろ、こうした手続きも、『梟とナイチンゲール』という作品をより深く読み解くための足がかりに過ぎず、作品に使用されている文体そのものが何を表象し、当時のイングランド社会に生きる詩人が、いかなる意識をもって作品を世に送り出し、その後の英文学史に影響を与えたのか、という、英語史と英文学史全体を俯瞰する壮大な視点が背後にはある。

筆者は、『梟とナイチンゲール』を編んだ詩人について、以下のように述べる。“The poet of *The Owl and the Nightingale* . . . does not cultivate novelty for its own sake. He does, however, cultivate conventions in his own way and, in so doing, finally achieves his own novelty” (50-51). 詩人に対する評価には、筆者自身の研究に対する姿勢に通じるものがあると思われる。一足飛びに、真新しい理論を提示することや意表を突くような発見というものを目指すのではなく、

むしろ、今まで積み重ねられてきた研究を精査し、そして、批評の源泉たる作品そのものに対して真摯に分析と考察を重ねることで、作品に込められた豊饒さを余すことなく読み取ろうとしている。その結果、従来の研究では辿り着くことのできなかった、作品の魅力や意義を新たに提示する境地へと至るのを可能としたのである。基本であり、最も重要な研究方法論を本書は示してくれている。加えて、筆者の本作品の研究を通して、言語、そして文学の「歴史」とは、過去から、我々が今生きている現代、そして未来へと常に伸び続けているものだと再認識させてくれる。現代人である我々が作品から受ける「印象」や「感覚」というものは偶発的なものなのではなく、言語とそれを使用する文学が積み重ねてきた長い歴史によって支えられてきたものである。時に、中世の作品が評価される際、「現代的である」と表現されることもあるが、そこには幾分、現代文学の方が発展形であり、過去の作品の方が未発達だというような、現代の「傲慢」が透けて見えることがある。しかし、筆者が本書で明らかにしているように、*Owl-poet* は当時の形式や伝統を継承しながらも、自らの作品を取り巻く環境への鋭敏な感性によって、未来の読者にも「軽快さ」や「親しみ」を感じさせる文体を実現した。そして、そうした詩人の試みは、Chaucer やルネサンスの文学者、更に後世の文人たちへと受け継がれ、英文学の伝統の礎を築く一柱となった。ゆえに、現代人がこの作品に抱く「現代的」という印象も、そもそも、*Owl-poet* や先代の文人たちが築いてきた伝統—言語表現自体の発展、そして、人間の〈個〉としての意識を表現するのに価値を認めることを、我々が途切れずに受け継いできたことを証明するものなのだと、改めて気づかされる。中英語文学の研究を志す者は言うまでもなく、文学研究を志す者であれば一読すべき書として本書を薦めたい。

註

- ¹ Neil Cartlidge (ed.), *The Owl and the Nightingale: Text and Translation* (University of Exeter Press, 2001) には、筆者の『梟とナイチンゲール』に関する研究論文が複数、参考文献に挙げられている。その中でも特に、筆者の〈音〉に着目した考察へ言及し (Introduction xxxiv)、反復表現に関する注釈に筆者の研究論文を挙げる (Explanatory Notes 46) など、これらの研究に対する高い評価がうかがえる。